

美術科教育学会通信 No.31

1998年12月22日発行

学会事務局 〒640-8510 和歌山市栄谷930 和歌山大学教育学部 美術教育学研究室

TEL: 0734-57-7359, 7358 (長谷川・永守研直通) FAX: 0734-57-7509, 7508 (同)

通信担当 〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学 TEL&FAX: 0742-27-9223 (宇田研直通)

第21回美術科教育学会 福島大会プレ学会報告

「ジェラシックパークのフランケンシュタイン」から「状況の主人公へ」

三浦 浩喜 (福島大学)

福島で開催される第21回美術科教育学会のメインテーマは、「子ども・学校論の現在 / 美術教育学の未来」です。

急激な学校状況の変化とともに、混迷を続ける美術教育を再生させるには、子ども論・カリキュラム論・学校論を媒介として、現実の子どもや学校との結節点を探ることなしにあり

えないと考えたからです。

去る11月8日(日)に開催したプレ学会はその第一弾として、「子ども論」の視角からアプローチを試したものでした。当日は、花篤實代表理事、

宮脇理前代表理事らをはじめとし、70名ほどの現場教師や学生・院生でにぎわいました。

メインの講演「子どもたちと現代の視覚・映像文化」の講師、中西新太郎先生(横浜市立大学教授・社会哲学)は、オウム事件以来、一貫して子ども・若者問題を文化状況との関連で解明させてきた方で、教育実践への造詣も深い研究者です。以下に中西氏の講演の要旨を記します。



挨拶する花篤代表理事



シンポジウム風景(左から三浦、中西、宮脇、阿部、柳沼、太田の各氏)



講演する中西新太郎先生

70年代後半以降、日本社会は世界的にも希有な、徹底した消費化が進行した。消費社会は、人間の存在の様式までも変化させ、とりわけ90年代のサブカルチャーの台頭に至っては、大人社会との文化的断絶とも言える変化をもたらした。

消費社会の中では、ただ存在することが一つの表現となり、絶えず他者のまなざしにさらされることになり、その中であって 本当の自分をどこかに隠しておかなければならないという、矛盾を内包することになるという。

こうした現代の若者を、氏は「ジェラシックパークのフランケンシュタイン」と呼ぶ。フランケンシュタインはここでは、「自分がどこから来て、どこへ行くのかわからない」存在を意味する。

情報過程の自立化は、コミュニケーション過程と主体を切り離し、さらには主体のすぐ替えが可能になってゆく。恣意的に選択された情景のコラージュは、現実的基盤から切り離され、映像として見えないものは、存在しないものと見なされるようになる。

若者達は、客観的なものではなく、自分だけの物差しによってリアリティを構築する。そのような中では、自分自身もまた根拠のないものであり、現実のなかで生きている自分が本当に自分自身なのか、現実との関係で確かめることができない。

それでは、彼らはどのようにして消費社会の矛盾をのりこえていけばいいのであろうか。氏は、以下のような提起をされた。

絵を描かないというが、描くことの前には膨大な「見る」経験が必要となる。これまでの文化的な蓄積をすり減らすことで生きている子どもたちに対して、現実の世界を受け止める 私 をどうつくるのかを、問題にしなければならない。

描いた作品に対して「あなたが作りたい世界が作れたのか」「あなたの描いた世界は世界に何を呼びかけているのか」といった問いかけをして社会化への回路をつくってゆくことが必要である。

子どもたちが描いた作品世界に「誰が応答するのか」「誰が応答しなければならないのか」を追求し、共同的ビジョンをつくりだすことが重要である。

後半は、「美術教育における子ども論の脱構築」と題したパネルディスカッションを行いました。美術教育方法論の硬直は、子ども論の硬直なのではないか、子ども論を解きほぐすことによって、方法論が拓かれるのではないかと考えたからです。

パネラーの阿部正明氏（飯野町立青木小学校）は、附属小学校にも勤務され、「表現科」の教科の枠組みづくりも行ってきた若い教師である。ディスカッションでは、図画工作において「経験」をどう考えればいいのか問題提起がなされた。

柳沼宏寿氏（福島市立福島第四中学校）は、今日の学校状況の抱える矛盾をダブルバインドとし、学校の現実を位相変換する装置としての美術教育のあり方が提起された。

太田隆明氏（福島県立保原高等学校）は、高校の美術部の中で一人の生徒がいかに自分の世界を構築したか、活動を紹介しながらの報告であった。

3氏の報告を受けて中西氏は、学校は、消費社会のように思うようにはならないけれども、友達と経験を共有することによって、独特な世界の開かれ方をすると。ところ。



パネラーの阿部・柳沼・太田の各氏



進行を務める三浦氏



中西氏と宮脇前代表理事

ある状況の中に自分がおかれたときに世界の見え方が変わってくる。これを「状況の主人公」と呼んでいる。そこから見えてくるものを大切にしたい。

消費社会の枠組の中でも、必死に人間が活着しているという現実が存在する。教育という枠の中で考えるのではなく、大きな社会の中で考えることが必要であろう。

というコメントを述べられた。

最後に宮脇先生から、パネラーの報告で、芸術教育を模索する新しい段階に入ったことを実感したという感想をいただいた。

さて、いよいよ3月の大会が近づいてきました。メインの講演は「リアリティの断面としての美術教育」と題した宮崎清孝氏(早稲田大学人間科学部・認知心理学)に決定しました。心理学と教育実践の断絶を、表現を媒介としてブリッジしようとする、冒険に満ちた講演になるかと思えます。

また、1日目のリレートークは3つのステージを準備し、「子どもたちの現在と表現論の再構築」「表現の息づく学校のイメージ」「美学からのアプローチ」の構想が固まりつつあるところです。1日ごとに発表者の数も増えています。

美術教育のみならず、公教育そのものが大きな転換期にさしかかっております。会員の皆様とともに、確信に満ちた美術教育学の未来をつかむ福島大会にしたいと、実行委員一同考えております。

研究ノート/実践報告

マリオン・リチャードソンの思想と方法

直江 俊雄（宇都宮大学）

ここ数年、私の取り組んでいる研究課題の一つに、今世紀のはじめに、英国の一地方の中等学校の教師として出発し、手本中心から子ども中心の美術教育への転換を指導した教育実践者であったマリオン・リチャードソン（Marion Richardson, 1892-1946）の思想と方法があります。この課題に至るまでの経過には、曲折があります。

約10年前、東京下町の中学校教師の職を離れて研究を開始した私は、学校で実際に行われている教育活動そのものを研究対象とすることを決意し、150以上の学校から資料を集め、教師が自主的に編成していくカリキュラムの特質を明らかにしようと取り組みました。その後、英国に学ぶ奨学金が得られたので、現地の制度と、学校で編成するカリキュラムとの関係を調査し、我が国における状況と比較していくという目的をもって、様々な調査活動を行いました。

ところで、私の滞在した中央イングランド大学には、リチャードソンの業績に関する遺品を収めた資料庫がありました。その中で、特に私の心をとらえたのは、500枚にも上る、子どもたちの内的視覚を表現した絵（「マインド・ピクチャー」）の美しさと、リチャードソンが各地の教師たちに、新しい教育方法の意義を説いて回ったときの、多数の未刊行の講演原稿でした。私自身は、子どもたちが生来の芸術家であるというような、余りに楽観的な理想が語られるときには、全面的な賛同を躊躇してしまうことがあります。しかし、この調査を通して、彼女の生前の思想は、病床で最期に綴った回想録〔註〕の感傷的な調子からはむしろ遠いもので、例えば、「自由表現」

などの響きの良い標語が、いかにたやすく本来の学習から離れたものになってしまうかという危険を訴え、その現実的な対案を、すでにこの時期に示そうとしていたことなどがわかってきました。

現在は、いくつかの観点から、この対象に迫ろうとしています。一つには、未刊行原稿などに見られる彼女の思想の特質とその形成の要因を探ること。二つには、作品資料をデータベース化し、より体系的な分析を交えて、彼女の教育方法の解明に関わること。三つには、現代での学校における実験を含めた、彼女の思想と方法のもつ意義の再評価です。

このように、今世紀前半における、学習者中心の美術教育への改革を研究対象にしながらも、私の立場では、歴史的には、近代美術の個人主義と、人間性への信頼の回復との教育における結合という意義は認めながらも、それらは、あくまでも美術の特質の一側面であり、近代的な個人の概念とは無関係な社会における美術のあり方を含め、知的理解を排除しない美術学習のあり方を全体像とすべきだと考えています。一方で、この時代の改革者たちの情熱を支えた理想の灯を、ほぼ一世紀を経過した私たちが、再び分かち合うことはできるのかどうか、という希望と関心が、この研究を支えているのだと思います。

少なくとも、今の私の立場からは、実証的な研究の裏付けと、現代からの批判に耐えられるだけの根拠をそこに見いだしていくことが課題であると思っています。ここに至って、実際に行われる教育活動そのものを研究対象にしようとした、10年前の私の関心の根本は、変わっていないことを認めるのです。

（このテーマに関するこれまでの成果は、学会誌第17号・18号、『アートエデュケーション』第26号に掲載していただきました。この研究テーマに関わって、平成10-11年度文部省科学研究費・奨励研究(A)「リチャードソンの教育方法に基づいた視覚的表現の多様性に関する研究」が採択されました。）

〔註〕Marion Richardson, *Art and the Child*, University of London Press, 1948.

書評&文献紹介

ハイデッガーを読む

大勝恵一郎（前・神戸大学教授）

スイスの山中で出会った学生と老教授、学生「先生今どんな本をお読みですか」老教授「今迄読んだ本を初めから読み返している」ある映画の一節だが、これまで足早に読んだ速力が悔やまれ雷鳴のような教示となった。

そこでハイデッガーを咀嚼し直す。主著『存在と時間』〔註1〕を20才代に7年間かけて読んだ。人間の時間が時計の時間とは異なることを哲学の問題として組織したのは彼の卓見である。生まれてから死ぬ迄の時間の内で例えば幼児期とか思春期に、はっと自分の存在（自我）を自覚し、何かを計画し実践する。人は自分の存在自体が投げられたものでありながら、何かを投げる、二重に投企的存在だという。また、日常生活を営み、死の恐怖に耐える存在の態様を問う。従来の哲学が観なかつた人間的なすべてを哲学の土俵にあげたのである。人は海の表層をたゆたう理性で人格を調整するが、深いところでは理性に逆らつて所謂実存が渦まいていと想定して、芸術は理性の直接の声よりも深海の非条理の声として捉えている。ヤスパースが、ゴッホやストロンドベルクの芸術に興味を示すのと共通する。然し、表層の理性は安心して寄り掛かれる場所ではなく、それは粗略な概念であり浅い社会通念でしかない。

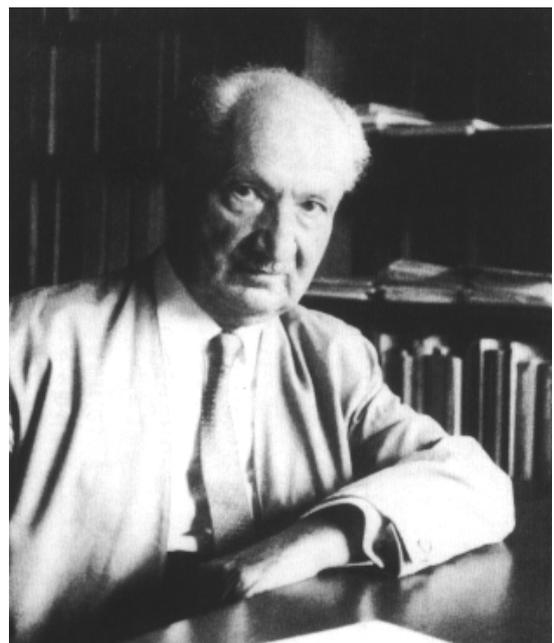
『芸術作品のはじまり』〔註2〕でハイデッガーは、芸術は覆われているものを一枚ずつはがして、「誠」を見いだす営みだと云う。ゴッホの靴は新品や看板ではない。また、履きつぶされて役にたたなくなった廃品でもない。「草には土のしめりと飽和があり、暮れかかる夕べの野道の寂寞が足摺りをしている」という描写は氏の文学的読取りの豊かさを示すと共に、絵から文学や思い入れを乾燥させることが近代だ

という思想に一顧だにしない以上に、覆いをはがしてものの本質（Wesen）、真実、まこと（Wahrheit）にいたる過程を述べる哲学の問題として、豊かな文学も美術をも包含していることを証している。

氏の『ヘルダーリンと詩の解明』〔註3〕で、「芸術は祭り」だという。世俗の人にとって祭りは年一度の神への感謝と交流だろうが、芸術家は常に祭りに生きている。「芸術は人間がなにものであるかを証明するもの」「永遠のものを建設すること」「芸術は世俗の榮譽にまさる。しかも、人間は芸術家としてこの地上にある」という。だが、理性の下部の深層にゴッホやヘルダーリンのような芸術家の制作や思想を参考とする哲学の方法に吟味の必要もあるかもしれない。然しこれらの3冊を熟読し、自分の人生をも織り込んでそれぞれの意味と相互基礎性を尋ねる時、読書の醍醐味が発酵する。教育が覆われた表層で詰込みにつつ学校が子どもの憧れから離れてゆく時、芸術教育が再び光を浴びるとしたら、問題の所在はこのあたりにあるだろう。

【註】

- (1)『存在と時間』寺島実仁訳、三笠書房、昭和14年
- (2)『芸術作品のはじまり』菊地栄一訳、理想社、1961
- (3)『ヘルダーリンの詩の解明』手塚富雄訳、理想社、昭和30年



マルティン・ハイデッガー（1889-1976）

Mail Box

このコーナーでは、会員の方々からの便りを掲載します。学会や美術教育に関するご意見等をお寄せください。

現場から大学の教員養成にかかわって

降籟 孝（山形大学）

学会通信に投稿するなど、そんな恐れ多いことできませんと断ったのですが、新井先生の気楽に書いてもらえばよいというお言葉や、学校教育現場から大学に出ささせていただいたということで、近況報告の義務も少なからずあるのではないかと考え直し、依頼を受けさせていただきました。

12年間半勤めたお茶の水女子大学の附属小学校から山形大学の教育学部に転任してから、早1年の月日が過ぎ去っていきました。最初の頃は、正直申して附属の学校教育現場と大学の生活のリズムのあまりの違いに戸惑うことも多かったです。ようやく、そのリズムや東京から遠く離れた地方での生活にも慣れてきました。

転任した地方の国立大学は、まさに大学改革の渦中そのものでした。教員養成学部定員の5000人削減の大きな波紋が、教育学部の在り方や新課程コースの設置等の決して止める事のできない大きな時代の流れを生んでいました。と同時に、我が造形美術教育においても、今までのように安泰としていられない厳しい状況に立たされているというのが現状です。大学改革は進行中です。今後どうなるのか、予断を許さないという所でしょうか。

また最近の若者の流行は、地方の国立大学にもおよび、東京と同じファッションや長髪・茶髪やピアスの姿もちらちらと見うけられます。また、大学のレジャーランド化の問題もよく聞かれる話ですが、御多分に漏れずこの大

学でも授業中の私語や携帯電話の呼び出し音が鳴ったりします。以前の附属校だったら、「〇〇くん、〇〇さん」と名指して注意するところですが、相手は大学生ですし、そんなことはしたくないものです。対応に苦慮する面も少なからずありました。

しかしある時、教室の後ろの方でこそこそ私語をしている学生達も、顔をこちらに向けて、しーんと聞いてくれる場面がありました。それは、附属校の時の経験を思い出し、子どもたちの様子について語っているときでした。

それは、非常勤で美術科教育法を教えている東北芸術工科大学の学生でも同じ反応を示してくれました。国立の教育学部と美大系の学生との気質の違いは、面白いほどありますが、教職に就きたいと希望をもっている学生の求めるものには、共通性があることを肌で感じました。

その時以来、美術教育の歴史や外国の現状など、定番のH・リードやローウェンフェルド、DBAE論なども授業内容として盛り込むこともしていますが、極力、学校教育の中の生きた児童や生徒の姿をイメージできるような授業を組み立てています。

さらに私の願いとしては、教育現場や実社会で生きて役に立つ実質的な教科教育を目指しています。これは単に、How To的な教育方法論の事を指してはいません。

また講義の初日には、現在の大学生の実態を把握するために必ずアンケートをとっています。いくつかの質問の中には、子どもの頃を思い出させ、図工や美術についてどのように思い、どう感じていたのか聞いています。

なかには、「とても楽しみの教科であった。」という学生もいる反面、「好きでなかった。」とか「嫌いだっただ。」「苦手意識が強かった。」と正直に伝えてくれる学生もいます。また「好きでも嫌いでもない」とか「息抜きの教科」というような、あまり教科としての存在感のない、どうでもいいような印象や経験であった学生も多いのです。

残念なことに、予想通りの結果が出てきてしまっています。この実態をどう考えればいいのか。ここにこれまでの造形美術教育の解決されずに積み残されている大きな問題があるように思えてならないのです。

我々が、目差し目差そうとしている造形美術教育の理想の姿と、それを受けてきた子どもたちの認識や理解の大きなずれのようなものを感じます。もしかしたら、当の現場の先生方の認識そのものにもずれがあるのかもしれませんが。

教科・教職の講義を担当し、アンケートや学生と接している中で実感している事は、やはり図画工作・美術教育の意義を明確に理解してもらう必要があるのではないかと切実に感じています。これから子どもたちの前に立つ教師や子どもの親になろうとするものが、造形美術教育の本質の理解なくして、この教科の存続意義はないと考えるからです。そうでないと、いつまでも表面的な表現技術や「上手、下手」という意識、息抜きや苦手不得意意識等の呪縛に囚われてしまうのではないのでしょうか。

今、私の研究テーマは、附属時代からの大命題であるこの造形美術教育の教科性の確立、大

袈裟に言いかえれば教科教育の再構築です。豊かな人間性とか情操の育成というような抽象的な言葉ではなく、もっと一般社会の人々にでも実感をもって納得でき、その重要性が本当に理解されるような具体的な造形美術教育の姿を模索しています。

教科内容の厳選と時間数の大幅な削減、さらに総合学習が学校教育現場に導入されるといふ厳しい状況の中で、我が造形美術教育の教科性とその独自性の明確化が急務であると考えます。今だからこそ、さらにその思いを強くしています。

ここは美学や美術史の学会ではありません。美術科教育学会です。この学会の果たすべき役割も大きなものがあると信じています。今後の本美術科教育学会の行方に大いに期待すると共に、会員の一人として全力でバックアップしていきたいと思えます。

「美術教育の課題と授業研究部会」報告

本研究部会は、神戸大学の東山明先生を発起人として、第16回学会(信州大会,1994)総会において「教授学研究部会」(仮称)として発足したものです。その後現在の名称に変更し、研究内容として「子どもの現状と美術教育における今日的な課題の研究と検討」「美術教育の内容と方向性、文部省の教育課程、学習指導要領の研究と検討」「美術教育の授業研究と教材開発・研究」「芸術文化における学校教育と社会教育の連携について」を掲げ、学会開催時にシンポジウム等を開催し、情報交換や意見交換を行ってきました。

1998年5月末の理事会の折に、代表の東山先生から、理事長及び事務局の交代に伴って新しい組織が発足したことを機に代表者を交代したいので、バトンタッチできないかとの打診がありました。

東山先生の熱意に心を動かされて受諾したのですが、学部改組にかかわる仕事などが重なってしまい、会員名簿の整備を行った後、具体的な活動を立ち上げられないまま今日に至ってしまいました。会員の方々にはたいへんご心配をおかけしていると思えますが、3月の学会(福島大会)で、研究会の会合を持つことが可能であれば、意見交換・情

報交換の機会をつくりたいと考えています。

去る12月14日に新しい学習指導要領の告示が行われましたが、2002年の学校週5日制完全実施に向けて、学校教育をめぐる状況は確実にしかも大きく動いています。こうした中で、本研究部会の存在意義も益々重要性を増しているわけで、その意味からも係としての責任を痛感しています。

部会を運営していく上での当面の課題は、全国に散らばっている会員の間に、どうネットワークを構築するかということではないかと思えます。最も効果的な方法として、ごく近い将来にホームページを開設し、電子メールを介した情報交換を行えるようにしてはどうかと考えています。もちろんその際には、電子メールを利用されない方もいるので、通信等の発行と並行して進めるつもりですが、また、今年度中にできることとして、会員の方々のご意見を文書でお聞きし、部会の通信としてまとめる予定です。

研究会に関する問い合わせ、参加申し込み等は下記までお願いします。

代表 新井哲夫(群馬大学)

【連絡先】〒371-8510 前橋市荒牧町4-2
群馬大学教育学部 新井哲夫
TEL&FAX:027-220-7316(直通)
E-mail:arai@edu.gunma-u.ac.jp

情報コーナー

(1) 事務局より

通信No.30の訂正について

前号の2頁の新理事の職務担当と事務局の関係の項で、「現場実践」の西野範夫氏のところに（連絡世話人の意）がついていませんでした。訂正をお願いします。

学会通信への投稿のお願い

本号より、学会通信の内容・レイアウトを一新しました。企画頁として「リレートーク」（次号No.32より掲載予定）「書評・文献紹介」「Mail Box」「研究ノート/実践報告」「研究部会情報」等のコーナーを設けました。各コーナーへの投稿をお願いします。

原稿は、1ページ当たり20字×88行（表題、著者名10行分を含む）にまとめ、E-mail又は郵送（できるだけワープロ原稿でお願いします）で、事務局通信担当（宇田）又は学会通信世話人（新井）宛にお送りください。写真等の図版も掲載可能です。

《原稿送付先》

* 宇田秀士（事務局通信担当）

〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学

TEL&FAX : 0742-27-9223（研究室直通）

E-mail : udah@nara-edu.ac.jp

* 新井哲夫（学会通信世話人）

〒371-8510 前橋市荒牧町 4-2

群馬大学教育学部

TEL&FAX : 027-220-7316（研究室直通）

E-mail : arai@edu.gunma-u.ac.jp

(2) 学会等

第22回美術科教育学会兵庫大会について

平成11年度の学会兵庫大会の日程、組織等が、以下のように決定しましたのでお知らせいたします。

会期 平成12(2000)年3月27日(月), 28日(火), 29日(水)

会場 兵庫教育大学 〒673-1415
兵庫県加東郡社町下久米 942-1

大会事務局（は大会会長）

辻田嘉邦 TEL:0795-44-2253(研究室直通)

福本謹一 TEL:0795-44-2255(研究室直通)

芸術系事務局 TEL : 0795-44-2253

FAX : 0795-44-2259

(3) 会員消息

* 茂木一司氏（鹿児島大学）が、平成10年3月18日付で、九州芸術工科大学（芸術工学研究科視覚伝達専攻）より、博士（芸術工学）の学位を授与されました。

美術科教育学会通信No.31をお届けします。前号で宇田理事（事務局通信担当）から予告がありましたように、本号から内容、レイアウト等を一新しました。どのような印象を抱かれたでしょうか。「ヴィジュアルなのはよいが、少し軽薄なのではないか」といったご意見もあるかもしれません。編集の方針として、とりあえず、一人でも多くの会員に親しんでいただけるようなものにしたいと考えました。学会の通信にふさわしい堅実な研究・実践にかかわる記事を積極的に掲載していくべく努力することはもちろんですが、そのことと、親しみやすくするということとは決して矛盾することではないと考えています。

通信の内容・レイアウト等に関する批判や苦

情、お叱り等がありましたら、どしどしお寄せください。そうしたご意見も、記事として順次掲載できればと考えています。そうしたことが、ささやかながら、宇田理事のいう論争を引き起こし、パワーを生み出せるような「刺激的な通信」を目指すことになるのではと思っています。

新編集体制下の最初の号ということもあって不手際が多く、ご執筆いただいた方々には、たいへんご無理をお願いしました。

それにもかかわらず、快くお引き受けいただき、新しい通信の出發にふさわしい充実した原稿をお寄せいただきました。この場をお借りして感謝いたします。

次号は3月発行の予定です。多くの会員の方の投稿を期待します（新井記）

編集後記